

地域情報（県別）

【大阪】耳鼻咽喉科領域で1000件以上の手術を経験し、2021年に独立開業-細野研二・ほその耳鼻咽喉科院長に聞く◆Vol.1

超音波検査、甲状腺機能検査、穿刺細胞診も行う

m3.com地域版

ほその耳鼻咽喉科（大阪市）は、超音波検査や穿刺吸引細胞診にも対応している耳鼻咽喉科だ。院長の細野研二氏は、20年ほど勤めた総合病院では1000件以上の手術の実績を持つ。2021年に開業した経緯やクリニックの特徴を細野氏に聞いた。（2024年11月14日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

クリニックの立地に天神橋筋商店街近くを選んだ理由とは

——クリニックの概要と患者さんの傾向を教えてください。

当院は大阪メトロ谷町線・堺筋線、阪急千里線が乗り入れる「天神橋筋六丁目」駅前、徒歩1分というアクセスの良い場所で、通学通勤の帰りでも受診しやすいよう、平日は木曜日を除き19時30分まで診療しています。医師は私1人で、看護師5人、受付8人で運営しています。

来院される方は、鼻やのどの痛み、風邪など、一般的な耳鼻科の症状が全体の6割くらい、喘息やアレルギー症状が2～3割ほど、くびの症状が1割くらいですね。くびは頭頸部外科の領域ですので、腫れや痛みはもちろん、橋本病やバセドウ病など甲状腺疾患の方もおられます。



細野研二氏

——甲状腺外来を受診する方はどのような年代が多いですか。

甲状腺疾患は女性に多い病気です。若い世代の方もいますが、40代以降の女性が多いですね。当クリニックは大阪の繁華街梅田からも比較的近いこともあり、周りに甲状腺内科を掲げる専門クリニックが数軒あります。当院の開院前から橋本病やバセドウ病などで通っておられる方が少なくありません。そのため当院にはここ数年で甲状腺疾患が見つかった新規の患者さんや、以前から病院で診ていた方が来院されています。

——新規の患者さんはどのようなきっかけで来院されるのでしょうか。

一番多いのは健診センターからの紹介です。近年、全国的に甲状腺の病気が見つかる割合が増えています。昔は今ほどではなかったのですが、健診の影響で増えています。

以前よりエコーの精度や臨床検査技師の技術も上がっていて、頸動脈と一緒に甲状腺を診ることも多く小さな腫瘍でも見つかりやすくなっています。健診結果に「甲状腺に腫瘍がありますので精密検査を受けてください」とあったので来院したとか、健診センターから直接紹介状をもらって来られる方が多いですね。当院では見つかった腫瘍が良性なのか悪性なのか検査を行い、治療や手術が必要なら設備の整った専門病院を紹介しています。

——ほその耳鼻咽喉科では、穿刺吸引細胞診を行っています。

穿刺吸引細胞診によって腫瘍が良性か悪性か、がんを疑う細胞がないかを診断できます。クリニックでここまで診断できれば専門病院への引継ぎもスムーズですし、患者さんにとっても良性の結果などでそれ以上の精査が必要ないと判断される場合には、病院を受診する時間を省けるというメリットがあります。勤務医のときは、超音波検査ができないクリニックから総合病院の耳鼻科へと紹介されてくるケースが大半でした。それを解消するために、超音波検査や甲状腺機能検査（血液検査）に加えて穿刺吸引細胞診も行っています。

健診センターで腫瘍が見つかり総合病院に行くケースもまだまだ多いのですが、患者さんの了承が得られれば当院に来られることもあります。腫瘍が悪性と分かれば、こちらで専門病院を紹介して手術を受けていただくことで、患者さんと病院の負担、両方を減らすことができます。甲状腺疾患の疑いがある全ての患者さんを、健診センターからこちらに案内してもらうわけにはいきませんが、クリニックの認知度が上がれば甲状腺部門も知られるようになります。そういう意味でも、当院が地域に貢献できる存在になればと思います。

——開業の経緯をお聞かせください。

自分が手術した患者さんが、診てほしいと外来に来る機会が増えてきたことが一つのきっかけです。私が以前勤めていた日本生命病院時代だけでも、手術室での執刀数は毎年100人以上となり計800人以上、それ以前の病院の手術と合わせると延べ1000人以上の患者さんと向き合ってきました。扁桃摘出術、鼻副鼻腔内視鏡手術、喉頭微細手術、小児の鼓膜チューブ挿入術、アデノイド切除術といった耳鼻咽喉科の一般的な手術以外にも、鼓室形成術（適応：慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎）、上顎洞根本術（適応：慢性副鼻腔炎、術後性上顎のう胞）、後鼻神経切断術（適応：重症アレルギー性鼻炎）、唾液腺手術（適応：耳下腺腫瘍、顎下腺腫瘍など）、甲状腺手術（適応：良性・悪性腫瘍、バセドウ病）、副甲状腺手術（適応：原発性副甲状腺機能亢進症）、頸部リンパ節郭清術（適応：癌のリンパ節転移）なども多数執刀させていただきました。

また、アレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法や好酸球性副鼻腔炎の術後再発に対する抗体治療薬を用いた治療なども積極的に導入してきました。その他補聴器専門外来も立ち上げ多数の患者様に補聴器のフィッティングを行い、購入後のフォローも行なっておりました。ただ同じ病院での勤務が長くなるにつれ担当する患者さんが増え、もし自分がこの病院を辞めたら術後の経過観察中の患者さんも含め行き場がなくなってしまう、病院側も患者さん側も困るのではないかという危機感を持つようになっていました。

さらに、手術も術後の管理も、患者さんへのケアも一通りできるようになり、自分の中である程度のレベルまで到達できたのかなとも思うようになりました。総合病院だと今後、転職になる可能性もあります。それなら自分のクリニックを構えて今来てくれる患者さんを引き続きケアできるほうがいい。術後の患者さんをクリニックで継続して診ていくのもありなんじゃないかと。手術が終わったら「はい、もう大丈夫ですよ」と患者さんを突き放すようなことはしたくなかったんです。さらにこれ以上総合病院にいても、若い先生たちの機会を奪ってしまうとも考えるようになっていました。

甲状腺のことで言いますと、耳鼻科で腫瘍が見つかったも、エコーができないと精密な検査ができません。血液検査での甲状腺機能測定自体は可能でも、当日に結果が分からないことがクリニックでは多く、検査の実施と検査結果を聞くために複数回来院しなくてはなりません。たとえ1日で済む場合でも、朝採血して結果を確認する診察はお昼過ぎという総合病院もよくあります。そのため、患者さんの負担をなるべく減らすためにもクリニックで専門的な検査を行い、結果を早く伝えられる仕組みをつくりたいと思いました。



大阪の繁華街の一つとされる天神橋筋商店街近くのビル4階に位置する

——開業するにあたり、天神橋筋商店街の近くを選んだのはなぜでしょうか。

日本生命病院の勤務が長かったため、周りの開業医の先生には公私ともに大変お世話になりました。そのため病院の近くに開業すると、周辺の先生方にご迷惑をかけてしまうかもしれないと思い、距離的に近すぎず、交通の便も良い場所を探すことにしました。

そんなとき、日本生命病院がある大阪市西区阿波座と似たような環境を見つけました。それが北区天神橋です。阿波座から地下鉄で20分程度とアクセスもしやすく、梅田まで近い土地柄ゆえ高層マンションがいくつもあり、若い世代の方も多し。長屋や団地など、昔から住んでいる方もいる。天神橋筋商店街の近くで活気もある街だったので、直感的にここがいいなと。奈良の病院で非常勤をしていたときからお付き合いがある患者さんも多く、その方たちに大阪まで来ていただく際の利便性も考慮しました。

◆細野 研二（ほその・けんじ）氏

2001年奈良県立医科大学卒業後、同大学耳鼻咽喉科教室に入局。済生会中和病院耳鼻咽喉科、大和高田市立病院耳鼻咽喉科を経て、2010年日生病院（現・日本生命病院）耳鼻咽喉科副医長。2016年同院耳鼻咽喉・頭頸部外科副部長。2018年日本生命病院耳鼻咽喉・頭頸部外科副部長。2021年ほその耳鼻咽喉科を開院。日本耳鼻咽喉科学会専門医、日本耳鼻咽喉科学会認定補聴器相談医、日本耳鼻咽喉科学会認定騒音性難聴担当医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、厚生労働省認定補聴器適合判定医、身体障害者福祉法第15条指定医、難病指定医。

【取材＝岡山朋代、文＝香川けいこ（写真はクリニック提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

